

平成28年度 長野県上田高等学校 卒業証書授与式 式辞

木々の蕾（つぼみ）や山々の装い、頬に触れる空気に、春の兆しを感じる季節となりました。

日頃から本校に対しまして格段のご支援・ご高配を頂いておりますご来賓の皆様のご臨席を賜り、本日ここに平成二十八年度長野県上田高等学校卒業証書授与式を挙行できますこと、まことに喜ばしく、衷心より御礼を申し上げます。

本日ご列席をいただきました保護者の皆様には、お子様のご卒業まことにおめでとうございます。多感な時期、大変なご苦勞もあつたかと存じますが、お子様がこのように心身ともに大きく成長され、本日卒業という晴れの日を迎えられましたこと、感慨一入（ひとしお）と拝察いたします。心からお祝いを申し上げます。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんは、本校で三年間あるいは四年間学び、歴史と伝統を誇る長野県上田高等学校の第百十五期卒業生として、その名を歴史に刻むことになりました。

皆さんは、高校時代に、NHK大河ドラマ『真田丸』、十八歳選挙権、スーパーグローバルハイスクール指定など、稀有の経験をしてきました。高校生活を振り返る時、その脳裏には何が浮かんでいるでしょうか。

本日皆さんに贈られるたくさんの「卒業おめでとう」の言葉は、幾多の悩みや葛藤、挫折や困難を乗り越え、様々な活動に前向きに取り組んできた、これまでの皆さんの精進、努力に対する賛辞であるとともに、未来を創っていく皆さんへの大いなる期待と激励、臆（はなむけ）の言葉でもあります。

さて、皆さんは「念ずれば花ひらく」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。元プロ野球監督の野村克也氏が好んで使っていたので、ご存知の方もいらっしゃるかもしれません。「念ずれば花ひらく」とは、仏教詩人の坂村真民（さかむら しんみん）という人の詩のタイトルであり、その詩の一節でもあります。

「念ずる」とは、心の中で祈ること、実現を強く願うこと、ですが、まずはその詩を紹介します。

「念ずれば花ひらく」（坂村真民）

念ずれば
花ひらく

苦しいとき
母がいつも口にしていた

このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった
そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった

と、こういう詩です。

「念ずれば花ひらく」—もちろん、ただ心の中で強く思っているだけで、何かが叶えられるわけではありません。しかし、「花ひらく」すなわち、「自分の夢や理想を実現する」ためには、「念ずる」すなわち、「こうしたいといつも強く思うこと、願うこと」が欠かせないのだと思います。苦しい時、物事がうまくいかない時、まだ自分の想いが足りないのだ、努力が足りないのだ、と考える。花がひらいた時、自分が一生懸命念じたから、自分の想いがカタチになったのだ、と考える。「念ずる」には「苦痛・悲しみなどをじっとこらえる」という意味があることも考え合わせると、この「念ずれば花ひらく」という言葉の意味が一層重みをもって感じられる気がします。

流れ星が流れている間に願い事を三回唱えればその願いが叶う、という言い伝えも、その一瞬に三回唱えられるくらいの想いをいつも強く抱いているかが問われていると考え、
「念ずる」ことの重要性を示しているように感じられます。

人生は一度きりです。そして、ほかの誰も自分の人生の代わりを務めることはできません。自分の人生の決定権はすべて自分にあり、その責任もすべて自分で負うのです。他の誰のものでもない、自分の人生を、後悔なく生き切るために大切なことは、自分自身の頭で考え、判断し、自分の意志で行動することに尽きると考えますが、その自分の考え、判断、行動は、先に述べた強い想いや高い志に支えられてほしいと思います。

これからの皆さんの人生には、時として、大きな困難が待ち受けています。いや、困難の連続だと言っていいでしょう。そんな時には、高校時代に、先程を含めて何度も歌った校歌を思い出してほしいと思います。上田高校を卒業する皆さんにとって、校歌は、古城の門とともに大きな拠り所であり、支えです。校歌に歌われている「至高の望み」、「至剛の誇り」を抱き、「いざ百難に試みむ」との気概を持って、困難を乗り越え、人生を切り拓いて行ってほしいと願っています。

「卒業」を表す英語には、graduationのほかに commencementがあります。この commencement という単語は、もともと「始まり」を意味しており、それが後に「卒業」の意味も持つようになったと言われています。冬の終わりと春の始まりが重なっているように、また、一つの別れが新たな出会いをもたらすように、高校の卒業は新たな人生の始まりでもあります。

結びにあたり、谷川俊太郎の『成人の日に』という詩の後半の部分を、卒業生の皆さんに送りたいと思います。

．．．

他人のうちに自分と同じ美しさをみとめ
自分のうちに他人と同じ醜さをみとめ
でき上がったどんな権威にもしぼられず
流れ動く多数の意見にまどわされず
とらわれぬ子どもの魂で
いまあるものを組みなおしつくりかえる
それこそがおとなの始まり
永遠に終らないおとなへの出発点
人間が人間になりつづけるための
苦しみと喜びの方法論だ

卒業する皆さんの人生が、光り輝き、幸福と充実感に満ちたものであること、そして、「自分以外の誰か」にも幸福をもたらすものであることを心から願って式辞といたします。

平成二十九年三月一日

長野県上田高等学校長 内堀 繁利